

公表

## 児童発達支援事業所における自己評価総括表

○事業所名	運動療育型児童デイぼうらの樹東住吉		
○保護者評価実施期間	R8年 2月 2日		R8年 2月 18日
○保護者評価有効回答数	(対象者数) 8名	(回答者数)	6名
○従業者評価実施期間	R8年 2月 2日		R8年 2月 18日
○従業者評価有効回答数	(対象者数) 7名	(回答者数)	7名
○事業者向け自己評価表作成日	R8年 2月 19日		

## ○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	生活・基礎スキル(指示理解、身辺自立、情緒面)を土台から支援できる	指示は短く具体的に、成功しやすい課題設定(スモールステップ)にして達成経験を積めるようにしている。 情緒面は、安心できるルーティン(始まり/終わりの流れ、休憩場所)を固定し、落ち着ける環境調整を行っている。 できた行動をその場で具体的に褒め、望ましい行動の定着を図っている。	目標を「いつ・どこで・何ができたらOK」まで具体化し、家庭・園でも共通の関わりで進められるようにする。 生活活動ごとに手順カード等を標準化し、スタッフ間で支援手順を統一する。 情緒面の支援として、クールダウン方法を個別に決め、どの場面でも使えるよう練習する。
2	小集団での“はじめての集団経験”を丁寧に積める(見通し・構造化)	活動の「見通し」を視覚化し、不安や混乱を減らしている。 小集団は人数・役割・ルールを明確にし、参加のハードルを下げている。 待つ・交代する・お願いする等の場面を意図的に作り、練習→成功→振り返りの流れで定着を促している。	小集団活動を「段階表(個別→ペア→3~4人→集団)」で整理し、個々の到達段階に合わせた計画を作る。 活動のルールや役割を視覚教材として整備し、見通しの質をさらに高める。 集団参加が難しい場面のパターンに対して、ロールプレイを増やす。
3	保護者連携が密で、家庭での関わり方まで一緒に整えられる(相談・助言)	送迎時の共有で当日の様子と家庭での変化を相互確認している。 保護者の困りごとを整理し、目標を「家庭で再現できる形」に落とし込んで支援している。 保護者の不安軽減のため、良い変化や成長を具体例で伝えることを意識している。	家庭で取り組みやすい「週1ミッション」を作り、継続しやすい形にする。 面談内容を「家庭での対応例」として紙1枚にまとめ、再現性を上げる。 保護者支援として、ペアレントトレーニング的なミニ講座やテーマ別相談(癇癪、偏食、睡眠等)を定期実施する。

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	発達評価・支援成果の見える化が弱くなりやすい(指標・記録の統一不足)	共通の評価指標を設定し、月次で達成度を確認する。 記録様式を統一し、「支援前→支援後」の変化が分かる書き方にする。	評価項目を共通指標化し、記録の観点を全職員で統一する。 目標を具体化し、できた/支援量/変化が分かる書き方に整える。 保護者へは、具体例と変化で伝えるミニレポート等を作成し、成果を共有する。
2	活動プログラムの幅(感覚統合、運動、認知、ことば等)の体系化が必要	年齢・発達段階別に「プログラム一覧」を整備し、誰でも実施できる形にする。 感覚・運動・認知・ことば・SSTの要素をバランスよく入れるため、月間計画で偏りを点検する。 外部研修や事例検討を取り入れ、支援技法の共通理解を深める。	年齢・発達段階別に、活動を整理したプログラム一覧を整備する。 活動を段階化し、同じねらいでも特性に合わせて選べるレベル別メニューを作る。 事例検討や研修で支援技法の共通理解を進め、提示方法・声かけ・支援量のばらつきを減らす。
3	医療・園(こども園/幼稚園/保育園)等との連携が個別対応になりがちで、仕組み化が課題	連携の手順をルール化し、必要時に迷わず動ける仕組みにする。 園との共有を簡潔にまとめたフォーマットを用意する。 園訪問やケース会議への参加を計画的に増やし、事業所での練習内容を園生活へつなげる。	連携フローを手順化・ルール化し、属人化を防ぐ。 必要ケースは園訪問・ケース会議を計画的に実施し、事業所での練習を園生活へつなげる。 連携内容は記録に残し、担当変更があっても継続できるよう引継ぎ体制を整える。